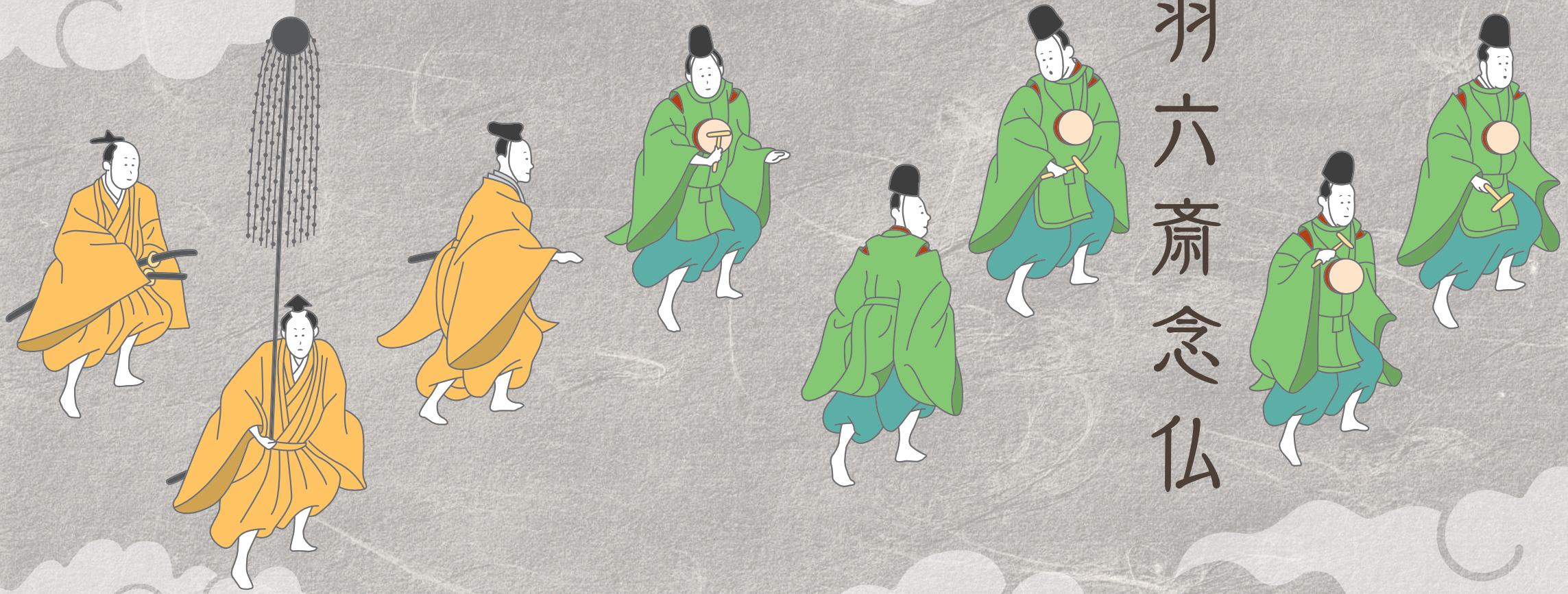


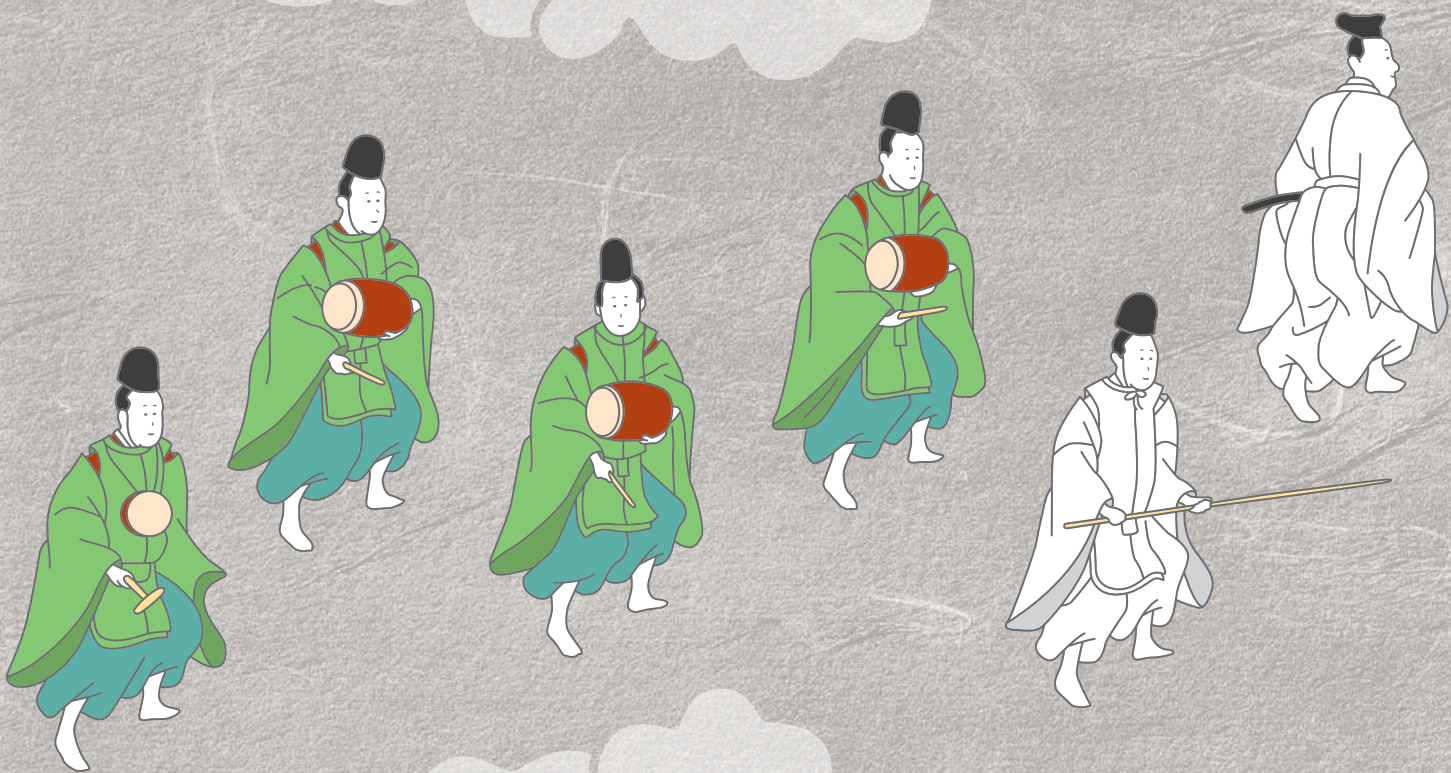
京都の民俗芸能

上鳥羽六斎念仏

国指定重要無形民俗文化財  
京都の六斎念仏

上鳥羽橋上鉦講中





## 目次

1. 六齋念仏のいわれ…………… p.1
2. 上鳥羽の六齋念仏…………… p.2
3. 演目  
念仏六齋と芸能六齋(六齋踊り)…………… p.4
- 3-1. 念仏六齋  
節白舞、飛観音、焼香太鼓…………… p.5-6
- 3-2. 芸能六齋(六齋踊り)  
葵願・結願/月輪/花唄娘/四つ太鼓…………… p.7-8  
わらべ/天狐/て姫/獅子と土蜘蛛…………… p.9-10  
祇園囃子について…………… p.11-12  
年中行事…………… p.13-14

# 1 六齋念仏のいわれ

六齋念仏は、盂蘭盆を中心に行われる伝統行事で、昔は全国各地で行われていました。古くは、平安時代の空也上人や鎌倉時代の道空上人によって始められたと伝わっております。「六齋」というのは仏教の「六齋日」の意で、太陰暦の月の満ち欠けに応じて、八、十四、十五、二十三、二十九、三十日の決められた六日に戒律などをまもり、慎ましく暮らす日と定められていました。

やがて、この日に念仏を唱えたところ、神仏の護持を得たという伝承によって、江戸時代になると津々浦々に六齋講や鉦講などと呼ばれる集団が形成され、念仏を唱えて近隣の村や都を廻るようになりました。

特に京都では、十七世紀頃にははなやかな町衆や花街の文化に触れた六齋念仏が、当時流行の謡曲や歌舞伎、獅子舞など、あらゆる芸を取り入れるようになり、六齋踊り（芸能六齋）が派生します。こうした経緯から、地域性豊かな民俗芸能として昭和五十八年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。



空也上人絵詞紙



拾漣郡名所図会

# 2 上鳥羽の六齋念仏

京都市南区上鳥羽は、かつて紀伊郡上鳥羽村と呼ばれる農村地域でした。しかし、昔より京都市中への入り口にあたるこの村には、数多くの伝承が残されています。刈萱道心の高野山参詣への起点となった萱堂誓祐寺、盛遠と袈裟御前の哀しい物語を伝える恋塚浄禅寺。そして平安時代に小野篁が冥途へ行き、六つの地蔵を彫ったことに起因する六地藏。その「四番とばひつじさるの方」（『京羽二重』）に位置するのが鳥羽地藏尊です。この古い伝承の息づく上鳥羽に伝承されてきた六齋念仏もまた、特別のいわれを現在に伝えています。

現在この上鳥羽で六齋念仏を伝承しているのが、上鳥羽橋上鉦講中です。この地で六齋念仏がいつ頃伝わったのかなど、その詳細は分かりません。

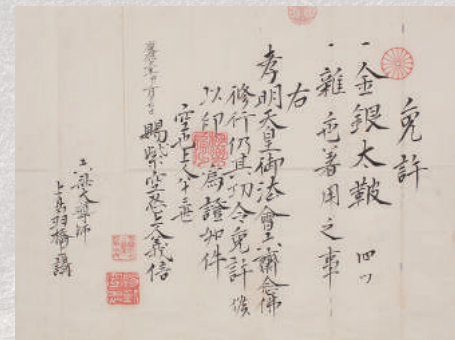
当講中に伝わる六齋念仏は、別名「空也堂念仏」とも呼ばれ、歴史的にも空也堂と呼ばれる空也上人開基の寺院との関係が深い団体です。講中の由来の多くも空也上人に淵源を求めています。例えば、当講では正式な行事には浴衣ではなく、水干（雑色）を着用していますが、その際の水干の色は空也上人の王服茶の伝承に従って、茶葉を連想させる萌葱色を着用するなど、細部にわたって空也上人の伝承の影響を見ることができます。

空也堂の古い記録である『六齋念仏収納録』には、上鳥羽には橋上以外にもこの地域に複数六齋念仏が行われていたことが記されています。明治十七年の記録では、「上鳥羽村橋上、同橋浦（はしうら）」とあり、さらに明治四十年には「上鳥羽村三組」という記載があります。このうち、昭和まで橋浦（橋下）が六齋念仏を継承しておりましたが、現在では継承者不足により廃絶しています。いまは橋上鉦講中のみが上鳥羽で六齋念仏を伝えており、上鳥羽の六齋念仏といえばこの橋上鉦講中を指すことが通例です。したがって、上鳥羽は「空也堂系」と呼ばれる六齋念仏に分類されております。

さらに空也堂からの免状には、「六齋大導師 上鳥羽橋上講」の称号が付与されています。六齋念仏における大導師とは、天皇家の仏教的送葬儀式である「焼香式」において、六齋念仏講中の筆頭として「焼香式」に出仕し、導師役を勤めたことによる称号です。



かみとばはしかみかねこうちゅう



上鳥羽橋上鉦講文書

## 念仏六齋と芸能六齋(六齋踊り)

京都の六齋念仏は、厳粛な儀礼である「念仏六齋」と、華やかな六齋踊りなどとも呼ばれる「芸能六齋」の二系統が知られています。現在、多くの京都の六齋念仏継承団体では「芸能六齋」を伝承していますが、当地区では今となっては京都に唯一の空也堂系「念仏六齋」を伝える団体となっています。

一方、かつて上鳥羽橋上には若中と呼ばれていた組が伝えていた「六齋踊り」もあり、念仏と芸能の両方を伝えていました。「六齋踊り」には、「祇園囃子」や「獅子」等の様々な演目があったそうで、なかでも「和藤内」という人形浄瑠璃「国姓爺合戦」に取材したものが得意とした曲であった等と伝わっております。しかし、昭和に入り久しく伝承が途絶え、古老の記憶からも薄れつつありました。

そのような折、壬生六齋念仏講中の方々のご尽力により、平成二十三年度に「四つ太鼓」を初披露する運びとなり、それ以来、地区の子どもたちが中心となって「獅子と土蜘蛛」のほか、様々な創作演目への挑戦に取り組み、往時の活気を取り戻してまいりました。

現在、鉦講中では、念仏の継承と一体となって、六齋踊りの復活にも取り組み、継承と発展につとめております。



### 3-1 念仏六齋



講中で伝承されている念仏は、鉦のみを用いる鉦曲と、太鼓を用いる焼香太鼓に分かれています。かつて鉦曲は「板東」「白舞」といった曲も伝承されていましたが、現在では「節白舞」「飛観音」の二曲が伝承されています。鉦曲は主に、講の毎月の行事である月次や棚経と呼ばれる盆の供養に唱えられるもので、前回向と呼ばれる「香華」「懺悔偈」「三宝禮」からなる浄土宗や天台宗空也法流で用いられる文句を独特の節をつけて唱えます。その後「節白舞」「飛観音」いずれかの鉦曲が入り、最後に、家内安全や無病息災、追善菩提などの後回向が行われます。



#### 節白舞

無常と浄土への願いを優美な節で唄う和讃。「はくまい」というのは六齋念仏の基本となる鉦曲のひとつとされ、「しへん」「ばんどう」「しころ」などととも全国各地に伝承をみることができます。この「はくまい」は声明や謡曲に近い音階を有しますが、これをもとにつくられた「節白舞」では、都節音階に変化して和讃も付加されています。大山崎や王生などにのみ伝承されていた京都固有の曲です。

悪逆五逆の罪深きゆえに 娑婆や世界に生まれをなす身が  
道の草葉に宿る露よりも なお消えやすき身 仇なる身を持ち  
なぬをか阿弥陀を頼まざる 唯繰りごとしよう 南無阿弥陀仏

#### 飛観音

西国三十三所の観音霊場のうち、打ち初めの那智山青岸渡寺、粉河寺、清水寺、書写山円教寺、廻り納めの谷汲山華嚴寺、およびお礼参りの善光寺の六カ寺の和讃を飛ばし飛ばしに唱えていることから「飛観音」と言われます。「飛観音」で唱えられる句や節回しは、ご詠歌の各流派のいずれとも異なる六齋念仏ならではのものとなっています。



紀伊の国の那智山観音 補陀落岸打つみ熊野の  
那智にの観世音前にて 札打ちはじめる 南無阿弥陀仏  
花の都の清水観音 音羽の滝の清き処の  
観世音前にて 札打ちおさめる 南無阿弥陀仏

#### 焼香太鼓

菊御紋の金銀太鼓を用いる荘厳な特別曲。地藏盆、大日盆、葬送時などに行われるものです。江戸時代後期以降、焼香式と呼ばれる天皇家の御大葬が泉涌寺、般舟三昧院両寺で行われましたが、その際に奉納されていたことから焼香太鼓という名称が付きしました。これは六齋念仏開祖とされる空也上人が、父である醍醐天皇の葬儀の際に、土足参内したという言い伝えによって、空也堂配下の講中の出仕が許されてきた経緯があります。上鳥羽は、その際に大導師としてたびたび御大葬に出仕していたという誇りから、この「焼香太鼓」を守り伝えてきました。



光明遍照十方世界 念仏衆生  
攝取不捨の光明は 念ずる処照らし給ふ  
観音勢至の来迎は 声を訪ねて向かい給ふ

### 3-2 芸能六斎(六斎踊り)



#### 発願・結願

六斎念仏の「一山打ち」と呼ばれる正式な奉納の折に、演目の最初と最後に行われる短い念仏。芸能性の高い六斎踊りが信仰の要素をとどめる重要な演目です。

発願已 至心帰命阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

#### 月輪

「発願」から連続して演じられます。静かな笛の音色と上打ちのカタ太鼓を打つ優雅な前半と、後半のテンポの良い活気ある側打ちの掛け合いによって構成されます。

たぬきが空に浮かぶ月をみて、何に化けようか思案する、という口唱歌がもとになって踊られます。



今宵誘われ 見上げるは月の輪

枯葉を乗せては誰に変わろうか わらべにしようか (イーヤ)  
あちらの旦那に こちらの女将に 娘にしようか (イーヤ)



(ソーレ) 都トテシャン 京の町娘

はんなりした浴衣に 髪を結うて簪  
手を袖に隠しては愛らしく (ソーレ)

#### 花唄娘

女性四人が、太鼓の掛け合いの後に、はんなりした手踊りを披露。女性が多い上鳥羽ならではの演目です。

#### 四つ太鼓

六斎踊りを習得する際に、初めに教わる演目です。

複数人の太鼓の打ち合いが基本の六斎念仏のなかで、代わる代わるに太鼓を打つ演目で、それぞれの打ち手の個性があらわれます。平成二十三年度に壬生六斎念仏講中から習い、初めて披露された芸能六斎の演目です。





## わらべ

中央に太鼓をリードする上打ちが一〜二名、その周りを囲みながら踊る側打ちで構成される輪踊りです。この口唱歌は、「丸竹夷」をイメージした数え唄のように作詞され、子どもたちが上鳥羽から壬生へ向かう道中の情景が描かれています。

上鳥羽 上がれば 壬生に着く  
裏の家から テンツル テンツル聞こえりや  
あさげ支度も 放り出して (ドッコイ)

## 天狐

太鼓の掛け合いのなか、狐の神職が登場して、雨をやませようと御幣を振ります。そして最後には、狐が雨の代わりに鈴を降らせませす。



どちらへ どちらへ おはくさんが通る  
どちらへ どちらへ おはくさんが通る  
にってんさん がってんさん お頼みします お姿をおがめ  
こちらへお座りくださいませ ほんにかしこみかしこみ申します

## 乙姫

上打ち二名の息を合わせた高度な掛け合いが見どころの演目です。説教節『しんとく丸』に登場する悲運の信徳丸を、観音の靈験によって救いだした乙姫を口唱歌にしたたものです。緩急のついた緊張感のある難曲です。



風に隠れる心は如何に 揺れる葉に泣き音を流し 月夜に見る想いの影

## 獅子と土蜘蛛

六斎念仏の掉尾を飾る演目で、勇壮かつ愛嬌のある獅子が登場し、次々と技の披露に興じます。やがて疲れた獅子が眠るとそこに土蜘蛛が忍び寄り、蜘蛛の巣を撒き両者の決闘が始まります。

決闘に勝利しつつも力なく疲弊した獅子は、太鼓に囃されてふたたび活力を取り戻し、六斎念仏の太鼓の功德が基大であることが示されます。



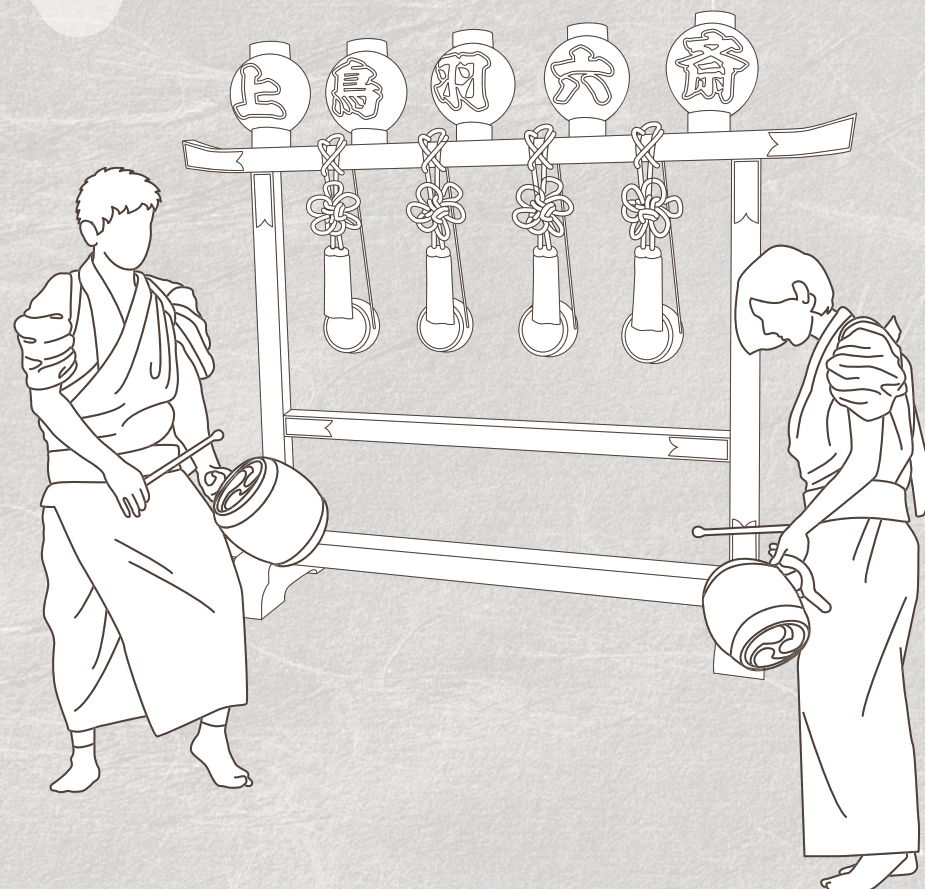
六斎踊りは笛、鉦、太鼓に軽快なかけ声が入る踊りですが、そのメロディーや踊りの所作は、口唱歌という歌によって決まっています。したがって練習は、この歌を覚えるところから始まります。

## ざおんばやし 祇園囃子

京都の夏の風物詩である祇園祭には、「コンチキチン」と愛称されるお囃子があります。そのお囃子を太鼓の踊りとして六斎念仏のなかに取り入れたものが「祇園囃子」です。

六斎念仏は、各団体が様々な個性的な演目を伝える一方で、「四つ太鼓」「祇園囃子」「獅子と土蜘蛛」の三演目は、すべての保存団体が共通して有する重要な演目です。この三演目のなかで、もっとも各団体の特徴があらわれる演目が「祇園囃子」です。各団体の「祇園囃子」を見ると、そのお囃子や、入れごとと呼ばれる踊りの最中に行われる芸能など、それぞれに差があることがわかります。祇園祭ではそれぞれの山鉦の囃子方が異なる囃子を伝承していますが、六斎の「祇園囃子」にも、どの囃子方の囃子を用いているのかという伝承の違いがあります。また、棒振り、道化、雀踊りといったように、それぞれの団体によって異なる踊りが披露されます。

上鳥羽六斎念仏では、平成三十年度から「祇園囃子」と呼ばれる演目の復活を目指して活動を続けてまいりました。上鳥羽でも、かつて六斎踊りで「祇園囃子」が行われていました。平成二十三年度に再び六斎踊りが行われるようになって以降、「祇園囃子」の復興は念願でした。「祇園囃子」の復興は、「一山打ち」と呼ばれる六斎踊りの正式な披露を行うにあたって必要な最後に残された演目であり、「祇園囃子」の復興が上鳥羽の「芸能六斎の復活」を意味します。上鳥羽の「祇園囃子」は壬生六斎の原田一樹氏によって再興され、六斎念仏の「祇園囃子」と祇園祭の「祇園囃子」をもとに作成されました。実際の祇園祭が連想できるような、巡行前半の渡りから後半の戻りのお囃子で構成されます。また、踊りの途中には巫女舞を挟む優雅な演目として復活しました。



上鳥羽の「祇園囃子」の復活は、「平成30年度伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム事業」に採択され、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス（京都市、京都芸術センター）と共同で実施しました。このプログラムは、伝統芸能文化を現代に適合した形で活性化させ、保存・継承・普及を図ることを目的としています。

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス ウェブサイト [www.traditional-arts.org/](http://www.traditional-arts.org/)



## 年中行事

### ● 鉦講中(念仏六齋)

8月11日 山の日

： 清水寺盂蘭盆奉納

8月13、14日

： 上鳥羽地区の棚経

8月22日

： 六地蔵巡り浄禅寺奉納

8月23日に近い土曜日

： 上鳥羽地区の地蔵盆奉納

8月27、28日

： 上鳥羽地区の大日盆(大日さん)奉納

### ● 芸能六齋

7月7日に近い土曜日

： セ夕の夕べ(於上鳥羽小学校)

8月22日

： 六地蔵巡り浄禅寺奉納(一山打ウ)

その他地域の様々なイベントで公演しております。

詳しくは上鳥羽六齋念仏公式ウェブサイトをご覧ください。[kamitoba-rokusai-jp](http://kamitoba-rokusai-jp)



後世所求  
生浄土皆  
得無生今  
忍足



重要無形民俗文化財「京都の六齋念仏」

上鳥羽橋上鉦講中

問い合わせ先：熊田茂男 TEL：090-2359-8195

京都の民俗芸能 上鳥羽六齋念仏

平成 31 年 3 月発行

発行：上鳥羽橋上鉦講中、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

撮影：中野 貴広

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

京都府京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2 京都芸術センター 2 階

TEL：075-255-9600 E-Mail：taro@kac.or.jp WEB：www.traditional-arts.org/